

第8回 文化を培うこれからの国土交通行政を考える懇談会

平成19年6月13日（水）

【座長】 それではこれから、この資料に関しまして意見交換したいと思います。

【委員】 この何カ月かのムーブメントをより一層具体的な、また価値あるものに、国民に浸透していくというふうに考えたときに、私はPRが専門なものですから、中間とりまとめのヘッドに何かスローガンがあると、より浸透するであろうということで、メモをつくってまいりました。対内的で国民の参加意識を盛り上げるためのスローガンは有効と考えます。

スローガンに適している用語の要素として、文化を培うという方向性をいかに出すかということと、国土交通省の存在感ということ、ここにパラダイムが変わってきているということに気づかれて、行政として考えていこうというニュアンスが必要でありましょう。3つほど、あくまで参考事例ということでご紹介します。

1つ目は、誇りや愛着の持てる国を目指すという、My JAPANとかLive JAPAN、まさに生きている我々というようなニュアンスの言葉です。

2つ目は文化を大切に、国づくりを示唆するものということで、パラダイムが変わっている、文化的な復権ということでいくと、Renaissance JAPANでありましょう。また、地域ということが出てまいります。そういった意味では、今の平成においてのそれぞれの地域の中心、京で、平成京 JAPANというような文言も考えてみました。

また、3つ目の方向性として、文化的な意味とか心の意味の両方を込めて、国土交通の基軸は「道」というふうにあえて焦点を当てますと、列島文化街道、まさにこれからそういった文化をつくっていくんだという心です。文化の細道をつくっていくんだという心でもいいのかもしれません。また、「文化を培う、これからの国土交通行政」というキャッチの下に抱き合わせで、Chemin à la Beauté、文化の国フランスというニュアンスです。美しさへ続く道、国土交通行政というChemin à la Beauté、また、Patoronageという言葉があります。文字どおり文化をサポートするという意味ですが、これもChemin de Patoronageという、文化を擁護する、また培うような道という焦点を当てましたが、今後、外に訴えていくときの参考になればということでご案内しました。

脱物質文明の時代を迎えたので、そういったときに、やっぱり文化が大事なんだという、

脱物質文明ぐらいの、文明という言葉を入れておいてもいいかなと感じます。

網羅的にまとめてあるので、これから次にどういうふうに進んで、生かしていけるんだろうというのは皆思うところだと思います。そこで、道の駅が今、各地にあります、非常にいい国交省のムーブメントだなど、賛否はあるかもしれませんが、とらえています。そういった具体的なものに今の懇談会の中間まとめが進んでいくことを切に願います。

【委員】 どういう視点が欠けていてこういう結果を招いてしまったというのが1ページでもいいから書いてあると、信頼度が非常に高まるんじゃないかと思います。それが第1点です。もう1点、国土交通省が文化行政に積極的に取り組もうと言っているわけですが、文化行政に取り組んでいるところは他省庁でもありますね。その関係についての言及がない。文化庁、環境省はそれなりに一緒にやっていけるとと思いますが、一番の問題は多分、財務省にあると思います。財布を握っているほうも、文化の大事さということに少し来てもらわないと、実際にはなかなか動かないですよ。

【座長】 もっともなご指摘です。そもそもこの懇談会をどう位置づけるかということと大変かかわってくると思います。最初の半年はさわりという形で、次の段階で国交省の今までの文化を少なくともきちっと整理していくのではないかなと思いますが、事務局から何か意見はありますか。

【国土環境・調整課長】 当初この会を始めた趣旨が、国土交通行政の現状ということを一たん離れて、巨視的な視野で、今後、文化というものが日本の国にとってどういう位置づけになるのか。その中で、国土交通行政で何ができるのかというようなことを論じていただくという趣旨でした。さらに踏み込み検討するのが次の段階になると考えているところです。

【委員】 要するにいろいろなしがらみを離れて、自由に議論して、途中から少し現実的なことを加味してということはよくわかります。しかし、部外者としてこの報告書をもって読むと、インパクトが弱い気がするわけね。中間報告であっても。

【座長】 文化について、かつて国交省で正面から取り組んだことがないということで、とにかく最初の半年は気楽な集まりにしようというのが趣旨です。今まで、いろいろな講師の方のお話を伺って、それで議論することに終始しています。委員同士でさらに昇華させるというような議論は全然しておりません、おっしゃるような、ややシリアスなところまで踏み込んだ内容に行けるのかどうか。そこまで議論し尽くしていないなという感じがするのです。

【委員】 「はじめに」のあたりで、その辺の事情を断ってくればわかります。

【座長】 おっしゃるとおりですね。「はじめに」のところにこの位置づけをもうちょっと書く、それはまことにごもっともですね。

【委員】 過去を検証するとか、これから先に次のステップがあるということをはっきり示して、そのブレインストーミングだということで、これで終わらないということがわかるようにしておかないと、誰の記憶にも残らない可能性がある気がします。

【大臣官房審議官】 「はじめに」のところをもう少し工夫してみたいと思います。これまで国交省でやってきたことを個別行政分野ごとにいろいろな工夫をしているはずですが、総体として、それがなかなか結実してこない、方向が見えてこないという問題だと思います。

文化というのは、言葉の意味が非常に違っていて、実際に行政に携わっているそれぞれの現場では、この場で文化をどう生かすかというのは、地域の住民の人それぞれがみんな意見が違ふし、自治体ごとでも意見が違ふので、それをどう取り入れるか、どう考えるかというところについて、明確な姿勢がなかったというところが問題かと思います。それをどうやっていくのかというのを書き込んでみようと思います。

ただ、座長もおっしゃったように、シリアスな議論で、詰めた議論はあまりしていないので、そういうのを1つずつ詰めていくという方向性を書く工夫をしてみたいと思います。

【座長】 次に何かするということも「はじめに」のところで書くのか、書かないのか。これで終わりという形の書き方にするのか。いかがですか。

【国土環境・調整課長】 今後もこの懇談会を継続していくことができればと考えております。その場合に、まずは理念的な部分を議論していただきましたので、次は、例えばテーマごとに、行政により踏み込んだ形で議論していただくということが必要ではないかと考えております。

【委員】 この組織を続けるかどうかということではなくて、また別の議論の仕方もあると思います。目標を掲げて、柱が立っていて、何年までに何をやるという数値目標があると次のステップが見える。少なくとも行政体として実現化に向けた次のステップがあるということが書いてあればいいんじゃないかなと思うんですがね。

【大臣官房審議官】 スタートのときには手探りだったんですが、この懇談会は大変おもしろかったというか、議論の過程で、ふだんあまり考えていなかったことについて、いろいろなご発言、ご指摘をいただいて、ためになったという思いがあります。

ただ、さっき申し上げたように、これを国土交通行政という非常に幅の広い行政の中で取り組んでいくときに、指針性を持たせないと動いていけないんだと思います。それは大まかな方向だけではなくて、個別具体的に落として、例えばこういう事例の場合にはどういうとらえ方をするのかとか、幾つかテーマを選んで、またディスカッションしていただくというようなやり方をして、それを積み上げていくと、少しずつ全体の目指すべき道、指針というような格好にできていくんじゃないかなという思いです。一つずつ掘り下げていく作業が要るかなという思いです。

【座長】 ありがとうございます。どうぞ。

【委員】 この中間とりまとめは、わかりやすくまとめていただいたと思っております。ただ、抽象的になっているので、次にどうするかが大切です。個人的な希望でいいますと、最終のゴールに、国土交通省の公共物だとかプロジェクトの何%かは文化予算とかデザイン予算といったものがある程度義務づけられるとか、あるいはフランスであるような、文化予算みたいなのが国土交通省の予算の中で何%かは必ずつけられるということまで持っていければ素晴らしいなと思います。それまでのステップはもう少し段階があると思うんですが。

ただ、文化というのはなかなか原価計算で効果を言えるものではありません。まずは啓発、大きくムーブメントとして起こす。そういう意味におきましては、私は、はっきりとスローガンを、やっぱり持つべきなんだろうなと思います。

【委員】 文化的なことというのは、言葉で簡単に言えないことで、楽しいということがすごく素晴らしいことだと思います。そういうこととか、情緒があるとか、人間的な風格があるとか、中身が濃いや、いろいろな人がかかわることではないかと思います。

美しい日本って、美しいというのは目で見ただ、表面的、ビジュアル的なものであっても、これもすごく大切に、形というのもすごく大切に、すべて形から始まっていくと思います。美しいというのは、形だけで、マナーということもあると思います。

日本をほんとうに自分たちで具体的に美しくしていかなくやという、予算がなきゃできないこともあるんでしょうが、やはり心がけというものがすごく大切な、大きな文化度の高いものだと思います。身を美しくと書いて「しつけ」と読みますが、美しくすることは、国も美しいが人も美しいというような、美しい中にも深い意味がたくさんあると思います。

国土交通省って、大きいと思います、建設省とすべて一緒になっていますから。だから、

空港とか駅というのは、最初に、外国人でも空港にぱっとおりて、日本の印象だと思うんですが、それも全部、国土交通省で、電車に乗って、遠くに行ってやっと文化があるなというんじゃなくて、駅とか空港は大切なところで、第一印象は空港だと思うし、駅ですね。日本全体が一つですが、日本の中にも、地方はたくさん特徴があって、そのアイデンティティ、個性とか地方のよさを反映するものであってほしいと思います。

先日私は秋田に行きまして、一部分ですが、空港の壁が秋田杉だったんですね。久々に、杉って何となくいいにおいがするような、ほっとするような、家の内装みたいですが、すごくいい感じがしました。

【座長】 最近、地下鉄の駅なんか、建築家に決めて任せるということが随分出ていますね。おっしゃるように、任せるとかなり個性が出ていますよね。

【委員】 今のご発言を聞いて、気づくことがありました。気持ちよく、自信を持って、誇りを持って生きるというのは楽しいというふうに解釈すると、例えば楽しい道というふうに言ったとします。そうすると、文化を培うこれからの国土交通行政で、副題が楽しい道というふうになったら、楽しいというのが道にあると何か次の展開が見えるような気がしたのと、楽しい駅とか楽しい空港という、楽しいというわかりやすい言葉を入れるだけで、何か展開が見えるなという感じがして、感銘を受けました。

楽しい道とか、効率論ではないんですね、楽しいというのは文化的な言葉だから。今までの国土交通行政は経済効果の追求といった固定概念がありますが、国交省が楽しい道と言われたら、ちょっとやわらかくなった気がしましたね。

【委員】 幾つかあります。1つは、ある程度のものはしっかりとしたレベルのものを、アイデアで競争するような仕組みが必要だと思います。設計を競争入札させないというようなレベルの話が、文化と絡むので、必要かなと思います。

それからもう一つは、報告書中身の話ですが、幾つかつけ加えたほうが良いということがありまして、その1つは、自然を再生するということは大きな文化なんだということを書いてもいいと思います。自然がものすごく豊かになって、それをいろいろな人が実感できるようになる。そのこと自体が非常に文化的な心の行為なんだということなので、自然再生をもう少し文化としてとらえるみたいな大きなことも書いていいと思います。

それから交流に関してですが、二地域居住というだけではなくて、都市的な文化と農村的な文化がお互い補い合っていくような仕組みが大事だ。例えばこれから先、中山間地域をサポートするのに、地域だけではなかなか難しいわけです。そうすると、その生活とか

環境、文化というのが都市の人間にとっても大事だということで、そういう人たちがサポートして、それは二地域居住になるかもしれないが、大きな意味でサポートする。それも金銭的な、いろいろなサポートの仕方があると思うんですが、どちらもそれぞれが補い合っていて、お互い不可欠なんだというようなことを、仕組みとしてちゃんと評価していくということの中に交流ということを使うと、もう少し話が大きくなるのかなと思います。

もう2つです。過去から未来への空間が連続していくということについて、今の我々の生活環境に何かつけ足したり、自分たちが責任を持って、次の世代に何かプラスにして受け渡していくということが地域の文化として大事だと思います。

例えば昔のお店だったら、店構えが信用をあらわしているので、ショーウィンドーと商品だけじゃなくて、建物として立派である。結果的にそれが一つの町並みをつくっていく。今のことで言うと、例えばマンションみたいに建て売りで、売ってしまったらもう関係ないので、次のところの仕事をして、そこで採算をとってしまったら終わりですね。そうではなくて、長期的に地域に責任を持っていく。一つの文化として、地域、社会の文化というか、マナーとして定着すべきだということが重要だと思います。

また、文化政策に関して、きちんと取りまとめるような専門家が育っていないのが大きな問題だと思います。文化省ができて、こういうことをやっていくとか、また、こういう先には文化とかに関して、ある程度地域のマスタープランをつくっていくということもあり得ると思います。そういうことを通じて専門家も育っていくということがあると思いますが、組織が人を育てていって、政策を生み出していくようなところもあるので、そういうことに関しても、何か言えるといいと思います。

【座長】 大変的確なご指摘をありがとうございます。最後の人材の話は、この中にも、将来を担う人をはぐくむという、子どもだけじゃなくて、文化行政の人材育成というような話も一言入れてもいいですね。

それから、過去から未来への継続性という言葉は、確かに世代間倫理とか継承というキーワードがあってよいですね。

全体を通じて、意識の共有とかそういう言葉はありますか。文化というのは、まさに意識の共有だと思います。

それから、調和という言葉は非常に大事で、いわゆる芸術とは何かというと、調和のレベルの高さだということを言いますが、そういうこともキーワードであってよいと思いますね。

二地域居住というのは、要するに補完というのは、非常に個性の違う文化、個性の違うアイデンティティの補完とかぶつかり合いこそが新しいフュージョンを生むということだと思いますね。

【委員】 例えば今、ふるさと納税の問題とかありますが、大都会に住むときに、周りに自然があることが、そこで守ってくれているから、例えば水の問題ですとかいろいろなあるわけですね。その意味で、補完関係みたいなものだ。だから、二地域居住で別荘が地方にあるというだけではなくて、もっと大きな問題としてとらえたほうがいい。

【座長】 競争入札を行うと安い設計料のものが一番になるわけですよ。そうすると、芸術的とか文化的価値も何も問わないでということで、制度として問題があると思います。

どうぞ。

【委員】 この取りまとめの中に「支援」というのがたくさん出てまいります。特に、最後の将来の文化を培う人材のところ随所に見られます。支援というのは、どうしても読んだ人は期待値がすごく膨らんでしまいます。具体的にどういう支援ができるのかというのがまだ決まっていない場合には、あまり支援ということを言わないほうがいいのではないかと。空手形をあまり発行されたら期待値が膨らみ過ぎてしまう。その点、いかがでしょうか。

【委員】 具体的な国からの支援ということもあるんですが、税制度がすごく大切な、大きな問題になると思います。支援というよりも日本の根本的な問題かもしれないですね。

【委員】 それに関連してですが、物納されたいいものがちゃんと、壊さないで次の住まい手に移るような仕組みとかそういうものは大事だと思うんですよ。建物が残っていたり、木が植わっていたりすることのほうが価値があるというようなことにしていけないと思います。

そうすると、1つは、物納をうまく機能させていくということと、それから、そういうものがちゃんと評価できるような資産評価の仕組みに変えていくべきではないかと思います。

【委員】 一言だけいいですか。

物質から文化へという話ですが、大量生産、大量消費の文化から、違う文明を求めていると思います。だから、文化を変えようとしているんじゃないで、省資源型の循環型の文明でしょう。

【座長】 それは、20世紀の物質に価値を置き過ぎた文明に対して、もう少し別の価値に置いた文明が必要ではないかという意味で、そのときに一つの方法が、いわゆる文化に価値を置いた文明という意味です。物質文明から文化文明へということで、決して21世紀になったから物質が要らないというわけではなくて、物質信奉主義を卒業しましょうという意味ですね。

これまた議論が尽きないと思いますが、この辺で終了させていただきたいと思います。きょうも大変活発なご意見、ありがとうございました。

きょうの委員会はこれで最終ですよ。あとの取りまとめは、きょうのご意見を受けまして、事務局と私のほうにお任せいただくということでよいでしょうか。

(「はい」の声あり)

【座長】 よろしく申し上げます。それでは事務局のほうから、今後の予定についてご説明をお願いします。

【国土環境・調整課長】 報告書の取りまとめをありがとうございました。

今後の予定につきましては、これまでの懇談会の議論を踏まえまして、具体的なテーマを決めて、さらに議論を重ねていくなどの方向を考えているところです。詳細につきましては、後日事務局より案をお示しさせていただきます。